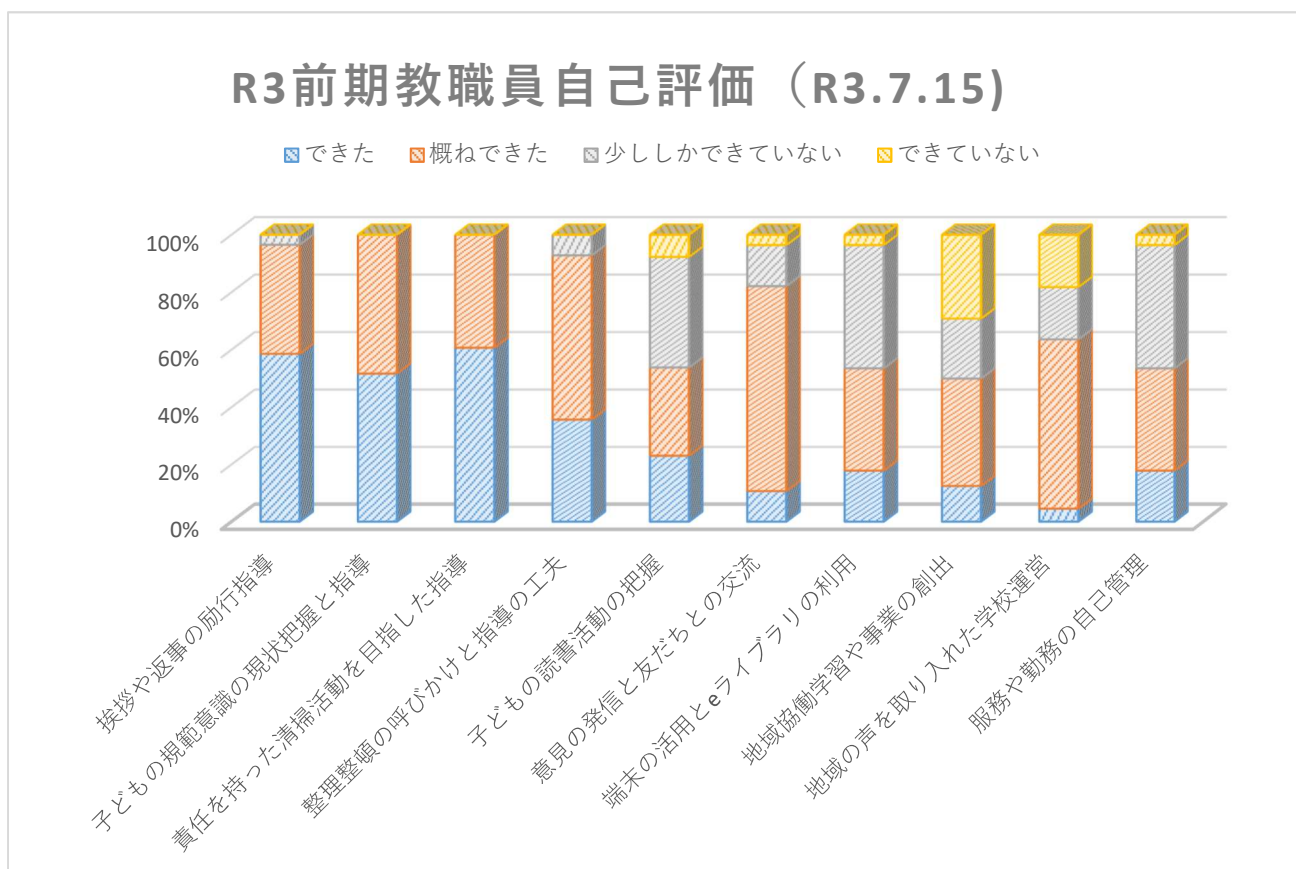


<令和3年度 前期 教職員自己評価>



1、こころと身体を子どもの成長に合わせてはぐくむ

(1) 児童が教職員への挨拶や返事、友だちや見守りボランティアへの挨拶ができていないかを気に向け、指導する。



この設問に対して「できた」「概ねできた」と答えた教員は96.6%でした。4月と5月の生活目標が「あいさつをしよう」で、教室前面に生活目標を掲示し、教職員はとても力を入れて挨拶や返事の指導をしました。また、地域の登下校見守りボランティアさんは、子どもたちのお手本になるよう、「おはよう」「行ってらっしゃい」「お帰り」「さようなら」と通学路で子どもたちに声をかけてくださいます。挨拶はより良い人間関係を築く大切なツールです。他人の気持ちを察することができなかつたり、人に譲れなかつたり、仲間作りができなかつたりといった人間関係形成能力の低下が、やがて、不登校やいじめにつながると言われていますので、学校全体で共通して取り組む課題として、今後も挨拶や返事の指導に当たりたいと思います。

(2)チャイムを守る、廊下を歩く等、学校生活の約束やきまりについて、児童の様子を全教職員で共有し、指導する。



この設問に「できた」「概ねできた」と答えた教職員は100.0%でした。教職員は、きまりや約束が守れない児童の様子を職員会議や職員朝礼等で度々出し合い、対応を検討し、「歩きましょう」「OK！歩いているね」等の肯定的な声掛けを心がけている教員もいます。

本校は特に、高学年児童の言動が全校児童に与える影響が大きく、兄弟や学童保育所、習い事や社会体育活動で、高学年から見聞きしたことを、年下の子どもたちが同じようにしようとします。だから、高学年の担任は、学級で、全校児童の手本になれるような言動について指導しています。しかし、ある担任は「子どもには何度も声をかけてきましたが、ルールを守らない姿は変わりそうにはありません。」、別の教員は「子どもの反抗的で、無気力で、拒絶的な態度によって教員のモチベーションが下がり、子どもを信じる情熱が消えてしまいそうになる時がある。」と悩んでいます。

規範意識は学校だけで育つものではありません。特に幼いころからの家庭での教育が大きく影響しますので、まずは、学校での子どもの姿を保護者に伝えることが肝心です。家庭でも「しっかり褒め、そして、厳しく叱って温かく見守る」教育をしていただけるよう、学校からの情報発信をしたいと思います。

(3)児童1人1人が責任を持って清掃できるように見守り、声をかける。



「できた」「概ねできた」と回答した教職員は、合わせて100.0%です。給食を食べた後、食器等の返却業務がない子どもは、当たり前のように、すぐに掃除場所へ移動しています。子どもたちにとっては、掃除をすることが学校生活の一部であり、ほうきを使うこと、ぞうきんを絞ること、ゴミを集めて捨てることは、学校では自然な行為で、恐らく家に帰ればこのような姿はないと思います。

だからこそ、学校における清掃指導はとても重要なのです。

「真面目に掃除をしましたか」という質問に、肯定的回答をした児童は89.3%です。しかし、「階段に大きな綿埃がたまっていて、1学期の放課後に3回ほど掃除をしたことがありましたので、児童の評価は実態よりもやや高いのではないかと思います。」という意見が教職員にありました。7月に学校運営協議会委員10名が、学校を視察された際には「(建物全体が老朽化していることもあるが)学校が汚い。」とのご指摘を受けています。よって、ほうきの持ち方、塵取りの使い方など基本的なことを再度指導していきたいと思います。

(4)身の回りの整理整頓に気を付けさせ、落とし物やなくしものを減らす工夫をする。



この設問に対して「できた」「概ねできた」と答えた教職員は92.9%でした。しかし、児童アンケートでは、8割ほどの子どもしか「整理整頓をした」と答えていません。物があふれる時代だからこそ、幼いころから、物をなくしたり落としたりしたらどうすればいいのかを教えることが重

要で、それが、学校ですべきこと、教職員が指導すべきことです。それをせずに、安易に別のものを与えたり買ったりすると、解決する力が身につきません。人が人として生きるための基礎をしっかりと身につけることが、子どもの豊かな人生への出発点となります。

今学期は、タブレット端末を授業等で使用することが多く、教科書やノート、副読本や筆箱等で、机の上は物でいっぱいでした。また、水筒を机の上に置いている子どもも見受けられましたので、7月からは水筒を机上に置かないよう、指導しています。身の回りを整理整頓し、学習環境を整えることで、子ども自身も安心して学びに向かうことができますので、ご家庭とも協力して取り組みたいと思います。

(5) 読書タイムに児童1人1人がどんな本を読んでいるのかを知る。



この設問に対して「できた」「概ねできた」と答えた教員は53.8%しかいません。担任等が子どもの読んでいる本を知ることは、その子どもが何に興味や関心があるのか、どれぐらいの語彙力があるのかを理解することにつながります。本校では、朝の読書活動は国語の学習時間として教育課程に位置づいていますので、子ども一人一人に対しての指導が必要です。だから、子どもの読む本を教員が知る事が大切なのです。

人は言葉を使って知識を得、物事を考え、コミュニケーションを図ります。言葉が豊かでないと、考えは豊かになりませんし、言葉が正確でないと考えも正確になりません。言葉の力を育むうえで、本を読むことが重要なことは、随分前から言われています。これからの時代に求められる国語力を向上させるためには、自ら本に手を伸ばす子どもを育てることが大切ですので、教職員は子どもの読んでいる本にもっと興味をもち、その子どもの興味関心に応じた本を紹介したり、読んだ本の感想を聞いてコミュニケーションをとったりすることが必要ではないかと思いました。

2、学ぶ力、考える力、探究する力をはぐくむ

(6) 自分の意見を書いてまとめさせ、それをもとにプレゼンテーションや新聞等多様な発信方法で友達と交流させる。



「できた」「概ねできた」と回答した教員は82.1%でしたが、児童アンケート「自分の考えをみんなの前で発表できましたか。」について、肯定的回答をした児童は68.0%しかありません。また、「友達の考えに対して賛成や反対の意見を言えましたか。」についても76.7%の児童しか「できた」「概ねできた」と答えていません。教職員の意識と子どもの出来具合が大きく異なっており、改善しなければならない点だと思いました。

自分の意見を根拠に基づき分かりやすく伝えたり、友だちとの比較・検証により深めたりする活動、考えの共通点と相違点を友だちと分析し、新たな考えを生み出す活動が「交流」です。そのような交流活動がある授業をすること、一層力を入れなければなりません。本校は11月に奈良県小学校社会科研究会の研究発表校になっており、授

業も公開します。そのため、夏季休業中、社会科の指導案検討会で、県教育委員会の教科指導主事や他校の経験豊かな教員が講師として来校されますので、意見交流活動のある授業について話を聞き、実践に活かしたいと思います。

(7)タブレット端末を活用した授業や e ライブラリを利用した家庭学習を進め、教員も児童も機器の扱いに慣れる。



この設問に対して「できた」「概ねできた」と答えた教員は 53.6%で、十分できたとは言えません。昨年度の 3 学期に、児童一人一人にタブレット端末と充電用アダプターを渡しましたが、4 月当初は、使用頻度に大きな差があり、自在に操って、一日何時間も学習以外に使用する子どももいれば、自分で端末を起動させることから指導しなければならない子どももいました。

教職員には「タブレット端末を活用した授業は取り入れたが、家庭学習での使用は進めていけなかった。家庭学習での使用実践情報を集めていきたい。」「低学年でもできるタブレットの活用について、様々な情報を得ていきたい。また、教師も事前に同じタブレットを使い、操作の試行や確認ができるよう、教師用タブレット端末の必要性を感じている。」という意見がありました。情報機器の活用技能と活用能力の向上は、教職員の深刻な課題です。個人で研修を進めるよりも、学年で研修を進める方が効果的で効率的だと思いますので、2 学期は学年会等で研修する機会を持ちたいと思います。

4、学校運営

3、地域と協働して活躍する人を育てる

(8)子どもが理解を深めるため、地域に住む方の力を借りて学習を進められるよう、新しい取組や新しい方策を考える。



この設問に「できた」「概ねできた」と回答した教職員は、50.0%でした。本年度は、スクール・サポート・スタッフや地域コーディネーターが配置され、地域人材の発掘とそなたちとの連絡調整ができる環境が整ってきました。だから、地域との連携事業で、新たな取り組みと方策を考えることが教職員の目標です。今までの取組や事業、活動に $+ \alpha$ の価値を求め、新規事業を開発して学校の教育委活動を応援していただける人を増やすこと、この2つに取り組んでいます。郷土学習に取り組んだ学年の教員は、「地域の方が大変協力的で、有難い。」と感想を述べています。新型コロナウイルス感染症の拡大が心配ですが、すでにワクチン接種を終えた高齢者の方からは、「大丈夫。楽しみにしていたので、今年も行けますよ。」と来校を楽しみにしている声が寄せられており、感染予防対策をとりながら、地域の方との交流に取り組もうと思います。

(9) 学校運営協議会や地域学校協働本部、育友会からの意見を自分の教育活動に活かす。



この設問に「できた」「概ねできた」と回答した教職員は、63.6%でした。学校運営協議会や地域学校協働本部、育友会の役員会や評議員会で出た意見は、翌日以降に、必ず教職員に伝えていきます。「めあて学習ができていない。」「学校が汚い。」「落ち着いた学習ができていない。」など、厳しい意見もありますが、鹿ノ台小学校の発展を見据えた大切なご意見ですので、教職員は真摯に捉え、学校運営の改善を図っています。学校教育活動は、学校の力だけではできないものです。地域の方や保護者の皆さんにご支援、ご協力いただきながら、地域と共に学校づくりを進めていかなければなりません。そのため、学校からは学校だより等で積極的に情報発信をしました。教員からは、「学校だよりで子どもの様子を発信したのは良かったです。良いことも悪いことも家庭には知ってもらわなければならないと思います。学校と家庭の中心に子どもを置いて連携し、何が課題で、何を大切に子どもを育てていくのか、同じ方向を向くために、情報発信はしていかななくてはならないと思います。」「保護者に協力してもらって、少しずつ落ち着いた学習環境が整ってきました。保護者の方々に感謝しています。」との意見がありましたが、「保護者の意見や思いを理解しようと努力するにつれ、自分の指導についてブレが生じており、非常に今、胸を痛めている。」という切実な悩みもありました。

(10) 就業時間(クロックアウト時刻等)、綱紀やマナーを守り、教職員が調和して学校教育活動に臨む。



「できた」「概ねできた」と答えた教職員は53.6%しかありませんでした。今まで本校では終業時刻を設定していなかったため、「教職員がいきいきと子どもと向き合う時間創造プログラム」の進行管理が遅れています。4月以降は月平均14人が45時間以上の超過勤務者なので、長時間勤務の改善にはまだまだ至っていません。しかし、終業時間を意識した働き方や日々の業務の精選には、どの教職員も取り組んでいます。クロックアウトや定時退勤日の設定は、教職員全員が「やろう」「努力しよう」と思わないと、学校全体として取り組めません。これが、「教職員が調和して学校教育活動に臨む」ということです。

「教員としての年数が浅く、仕事が遅れがち。表面上の就業時間を短くしても持ち帰り仕事がある。」という若手教員からの声は今後の検討課題です。また、教職員の人数については「トラブル対応をしている時や支援の必要な児童に対応している時など、どうしても人手が必要な時に助けてもらえる人材を・・・。」という切実な訴えもあり、特別支援教育支援員や学生サポーター、スクール・カウンセラーやスクール・ソーシャル・ワーカーの増員や配置について、市教委とも交渉していかなければならないと感じています。